



「聴くこと」としてのケアリング

中川, 雅道

(Citation)

研究紀要 : 神戸大学附属中等 論集, 6:1-6

(Issue Date)

2022-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81013133>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013133>



論考

「聴くこと」としてのケアリング

Caring through “Listening”

中川 雅道

NAKAGAWA Masamichi

子どものための哲学では、私たちは自分の考えをケアしつつ、誰かの話を聴くことになる。そのとき、私たちは、話された考えをケアしながら、話しているその人の存在をもケアすることになる。聴くことのある方、ケアのある方には様々な可能性があり、聴くこと、そしてケアリングそのものに、大きな力が隠されていると言えるだろう。

In philosophy for children, we listen to others while caring for our thoughts; through this experience, we care for the existence of a person while caring for their ideas. Though there are many ways of listening to and caring for others, listening and caring itself are extremely important.

キーワード：子どものための哲学，ケアの倫理，臨床哲学

Key words: philosophy for children, Ethics of care, Philosophy in Practice

I はじめに

だれかに話を聴いてもらう。すると気持ちがなげだか、楽になる。思い悩み、もしかしたら体調が悪くなっていたりするかもしれない。悩みの原因であったはずの問題が、解決されたわけではない。それなのに、気分が楽になって明日からも生きていける。そういう感触を、私は自分自身の教育の中心に置いている。

はじめて出会う日に、その場にいる人たちが自分のことを話しながら毛糸を巻いていく。すると、コミュニティボールができていく。できあがったボールを使って、いろんな不思議 wonder を話し合う。ボールを持っている人のことを、クラスの人たちはゆっくりと聴くことになる。友達ってなんだろう、親に嘘をついてはいけないのだろうか、宇宙はどうやってできたんだろう。そういう活動は、子どものための哲学 philosophy for children = p4c と呼ばれてきた。

さて、こういった「聴く」こととしてのケアリングについて考えておこうと思ったのには、いくつ

かのきっかけがある。「どうして p4c を続けているんですか」と尋ねられることが多くなり、自分なりに大切にしていることを何度も話してきた。それでもいつも、何かが伝わらないという手触りが残った。その感触が、私の頭を悩ませてきた。

今回は、その手触りについて考えてみたい。学校の中で「対話」を重視しようとする姿勢は、目の前にいる人の話を丁寧に「聴く」ことに他ならない。そして、誰かの話を聴き続けることは、ケアリング(手助けすること、援助すること、配慮すること、そして、依存すること)へとつながっている。私がいまこの場所において、子どもたちの話を聴いてみたり、そして、私の話を子どもたちに聴いてもらったりしながら、その場に居続けていることは、教室の中にケアし、ケアされる関係を実現することだったのだと、年月を経るにつれて思うようになった。同時に、このことは多くの学校、多くの教室にケアリングが欠けていることを主張することにもなるだろう。

II 「ケアの倫理」と「特別の教科 道徳」

「ケアの倫理 Ethics of care」と呼ばれる思想潮流を、まずは概観してみよう。Brugère (2013) は「ケアの倫理」をネオリベラリズム (新自由主義) との対決の図式の中で構想する。ネオリベラリズムの立場に立つ論者たちは「正義」や「道徳」を重視し、自立した個人が、正義の原則を守りつつ道徳的に生きることを思い描く。それに対して、「ケアの倫理」は Gilligan (1982) が Kohlberg (1973) への批判として提出した「女性の声」に根ざしている。Gilligan は、女性には男性と異なった倫理があると述べる。女性は個別的な状況を重視し、人々を配慮し、支え、手助けをしてきた。女性の倫理は、人間がそもそも脆弱で、支えが必要で、相互依存したものだところから始まる。女性の声の表明として表れた「ケアの倫理」は、しかし、自然的な性差にはこだわらない。もちろん、女性ではない人たちもケアに関わる。自立した個人による自己責任が問われ、「経済成長」が第一の理念として掲げられる現在の日本社会にこそ「ケアの倫理」が浸透することが求められていると思われるのではない。

「ケアの倫理」の視点から、現在の日本の学校で行われている教育を眺めてみると、あまりにも自立した個人へと、責任を持つ主体へと人間を改造する仕掛けに満ちているように見える。とりわけ「特別の教科 道徳」はまさにそういった「自立」のための原理・原則を教える場になってはいないだろうか。小学校から中学校へかけて扱うべき内容項目 (自律の精神を重んじ、自主的に考え、判断し、誠実に実行してその結果に責任をもつこと、など) が定められ、普遍的なことばで表されている。「ケアの倫理」の立場に立ちつつ授業を構想するためには、そういったパターナリスティック (父権主義的) な原則から、一旦は身をひいてみるのが大切なことだ。

そのことを、こんな風に言い換えてみることもできるかもしれない。子どもたちを自立に駆り立てるのはそろそろキッパリとやめてしまっ、何かに依存している自分のことを理解し、子どもたちと助けあったりもできるような、もっと優しい

学校を目指さないといけないんだよ、と。

III やさしい哲学探究

p4cのことを説明する論考をまとめたときに、ハワイで素晴らしい実践を続けてきた Thomas Jackson (2001) は、その論考に Gently Socratic Inquiry というタイトルをつけた。p4c は、まずは探求 Inquiry である。Inquiry の中心には Wonder がある。Wonder は私たちが悩ませる謎でもあるし、考えてみたい問いとして思い描くこともできる。同時に、どこか私たちがワクワクさせる未知の世界への冒険としても理解できる。Wonder に満ちた p4c の輪の中で「宇宙ってどうやってできたんだろう？」と問いかけるときに、優しさ Gentleness が必要になると Jackson は考えていた。

どうして優しさが必要になるのだろうか。Jackson はこんな風に答える。なぜならそこに、あなたの目の前にいるのは「子どもたち」だからですよ、と。

ここでいう「優しくなること」の意味は、こういうことかもしれない。(年齢が低かろうが高かろうが) 私たちはいつでも、謎の答えを知っているふりをする大人になることができる。また、謎の答えを追い続ける子どもになることもできる。私たちは、誰しも大人になることもできれば、子どもになることもできる。p4c の輪の中で Wonder を胸に灯すためには、恐怖、自分の無知が暴露されるという恐怖、に苛まれているわけにはいかない。年齢の低い子どもたちであっても、大人たちと同じ恐怖に晒されている。だから、私たちは優しくならないといけないんだよ、と。

ここで私の関心は、さらにケアリングに近接することになる。哲学実践者でもあり、哲学研究者でもある永井 (2021) は、哲学の実践について次のように述べている。

哲学は知をケアする。真理をケアする。そして、他者の考えを聞くわたし自身をケアする。立場を変えることをおそれる、そのわたしをケアする。あなたの考えをケアする (永井, 2021, p. 97)。

永井は、哲学対話の場では、知をケアするために「自分自身」をケアすることになり、あなたの考えをケアすることになると述べる。哲学対話の中では「考えを変えてもよい」というルールが提示されることがある。知ること、知りたいと思うこと、知りたいと願い続けることが哲学なのであるから、誰かが話す、新しい意見を聴きながら、自分の内面の声を聴き、自分の考えを変えてもいい。そのとき、私は私の考えに配慮し「他者の考えを聞くわたし自身をケアする」。

誰かの考えを聴くとき、まずは私の変化から始まる。そして、あなたの考えをケアすることになる。聴くことの力は、そこで止まるだろうか。

私は、さらにその先、あなたの考えを聴くことの、その先に、聴くことが「あなた自身」をケアするという現象が確かにあると思うのだ。

IV 聴くことの力、再論

臨床の中から生まれる哲学という理念、「臨床哲学」ということを鷺田清一が語り始めたとき、まだそれは夢の始まりであった。大学という制度の中から、さまざまな実践（プラクシス）が生まれた。哲学をする人たちが街に繰り出し、さまざまな人たちと語り合う哲学カフェ。ある種の教育の形として、そしてまた、市民による合意形成の方法として開発されたネオソクラティックダイアログ。そして、学校の中で哲学することの一つの可能性として生まれた子どものための哲学。それらの様々な実践が臨床の場に流通することになった。私はここでもう一度「聴くこと」が誰かをケアする可能性をもつものとして、臨床哲学の新しい可能性を論じてみたいと考えている。

1. 聴くことの力という理想

鷺田（1999）は、聴くこととしての哲学の可能性について考えるために、ターミナルケア（終末期におけるケア）についてのアンケートを引用する。

ターミナルケアをめぐるアンケートのことだ

……「わたしはもうだめなのではないでしょうか？」という患者のことばに対して、あなたならどう答えますか、という問いである（鷺田、1999, p. 10）。

目の前に「わたしはもうだめなのではないでしょうか？」と問う患者がいたときに、あなたならどう答えるだろうか。アンケートには、次のような五択の答え方が用意されている。

- ①「そんなこと言わないで、もっと頑張りなさいよ」と励ます。
- ②「そんなこと心配しないでいいんですよ」と答える。
- ③「どうしてそんな気持ちになるの」と聞き返す。
- ④「これだけ痛みがあると、そんな気にもなるね」と同情を示す。
- ⑤「もうだめなんだ……とそんな気がするんですね」と返す。

さて、このアンケートの選択肢①～⑤には、誰がそのように答えやすいかということがある。医師や医学生ほとんどが①を、看護師のほとんどが③を選ぶ。誰かの話を聴くことには、職業的な規範が存在している。医者は、病を治療するという立場であるから、無自覚のうちに病からの回復を願う。それに対して、患者のケアを担う看護師はその患者の「気持ち」に寄り添うために「気持ち」を確認する。さらに、精神科医やカウンセラーの多くは⑤を回答した、というのである。

鷺田はここで⑤の回答が、患者のことばの実質的な反応にはなっていないことに着目する。精神科医や心理臨床のカウンセラーが行なっているのは「もうだめなんだ……とそんな気がするんですね」と、ある意味では患者の答えを繰り返すことによって、その言葉を受け止め、患者自身の自己理解を促す可能性がある、というのだ。そのような聴くことの実践の中に、鷺田は哲学の一つの可能性を構想した。

聴くことが、ことばを受けとめることが、他者の自己理解の場を劈くということであろう。じっと聴くこと、そのことの力を感じる。かつて古代ギリシャの哲学者が《産婆術》と呼んだような力を、あるいは別の人物なら《介添え》とも呼ぶであろう力を、である。

わたしがここで考えてみたいこと、それがこの〈聴く〉という行為であり、そしてその力である。語る、論ずという、他者にはたらきかける行為ではなく、論じる、主張するという、他者を前にしての自己表出の行為でもなく、〈聴く〉という、他者のことばを受けとる行為、受けとめる行為のもつ意味である。そしてここからが微妙なのだが、〈聴く〉という、いわば受け身のいとなみ、それについていろいろと思いをめぐらすことをとおして、〈聴く〉ことの哲学ではなく、〈聴く〉こととしての哲学の可能性について、しばらく考え続けたいとおもうのだ(鷺田, 1999, p. 11)。

このようにして、臨床哲学は聴くこととして構想される。他者の言葉を受け止めるという営みの中で、聴くこととしての哲学の可能性が開かれたのである。

さらに、鷺田は、精神科医レインの言葉を借りることで、聴くことと理想を追求する。レインはある患者との面談の場面を次のように回想する。

ある看護婦が、ひとりの、いくらか緊張病があった破瓜型分裂病患者の世話をしていた。彼らが顔を合わせてしばらくしてから、看護婦は患者に一杯のお茶を与えた。この慢性の精神病患者は、お茶を飲みながら、こう言った。〈だれかがわたしに一杯のお茶をくださったなんて、これが生まれてはじめてです〉(鷺田, 1999, p. 83)。

この患者は、一杯のお茶を提供されたことに心からの安泰を感じ、自分の存在を聴かれたと感じ、存在をケアされたと感じたのである。なぜ、そのようなことが起きたのだろうか。鷺田は、次のように説明する。

レインはこう解釈する。あるひとがわたしに一杯のお茶を入れてくれるばあい、そのひとはわたしの気を惹こうとしているのかもしれない。わたしを味方につけようとしているのかもしれない。わたしに親切にしておいて、あとからなにかをせびろうという魂胆があるのかもしれない。あるいは、じぶんの茶碗やティーポットを見せびらかしていることもありうる。あるいは、あるいは……。だれかにお茶を入れるということ、そのことが、他人に求められたからではなく、業務としてでもなく、もちろんティーセットを自慢するためでもなく、「だれかのため」「なにかのため」という意識がまったくなしに、ただあるひとに一杯のお茶を供することとしてあって、それ以上でもそれ以下でもない、そういうふうにして他人にお茶を入れてもらったと患者が感じたことはこれまでなかったというのだ(鷺田, 1999, pp. 83-84)。

誰かの話を聴き、その人をケアするという行為は、常に誰かの前で行われる。そのとき、私たちは誰かをケアしているようでいて、別の目的を持っているかもしれない。単に、その人の気を惹こうとしているだけなのかもしれない。自分の聴く力を見せつけているだけかもしれない。ケアリングは常に偽物になりうる。

しかし、患者が心からの感動を覚えたのは、ケアすることがケアすることのためにあり、それ以外のためにはないというように感じられたからなのである。聴かれることが聴かれるためにある、という美しい可能性を、鷺田は提起した。臨床哲学の可能性は、あまりにも美しいロマンの中にある。私たちは、あるひとの存在をケアするためにケアする。p4c の輪の中で、子どもたちの話を聴くために聴く。何ら他の目的のためではなく、子どもたちの前で偉そうに振る舞うためにでもなく、話を聴くことによって子どもたちに好かれようとするのでもなく、子どもたちの存在を、その実存の全てをケアするために、私たちは子どもたちの話を聴き続ける。それは美しい理想であり、私は

この美しい理想に少し気後れしながらも、賛同してみたいと思っている。

2. 聴くことのもう一つの姿

私はもう一つの聴くことのあり方を、提示してみたい。先ほどのアンケートを、過去に p4c の中で生じた状況に適応してみよう。

ある日の授業のことです。勉強が何の役に立つかわからない、と繰り返す生徒に、あなたならどう答えますか？

- ①「そんなこと言わないで、もっと頑張りなさいよ」と励ます。
- ②「そんなこと心配しないでいいですよ」と答える。
- ③「どうしてそんな気持ちになるの」と聞き返す。
- ④「これだけつらいと、そんな気にもなるね」と同情を示す。
- ⑤「何の役に立つかわからない……とそんな気がするんですね」と返す。

あなたなら、どう答えるだろうか。学校の先生はやはり①を選びやすいだろうか。勉強させることが職務の一つに数えられるとしたら、①と答える教員は仕事ができる人なのかもしれない。あるいは、傾聴の価値が強調されているため③の選択をとる教員も多いのかもしれない。先ほどのアンケートと同じように、ここでもまた聴くことは職業的規範に依存しているようにも見える。しかし、いずれか一つの答えが正しいということではないだろう。

⑤の可能性から美しい理想へと至った思考とは異なった考えを、実はレイン自身が提示している。レインは次のようなことを語りながら、⑤の回答を与える精神科医や、カウンセラーは患者の話を実のところ受け止めてはいない、と指摘する。

私は、二十五歳の分裂病の女性に対する治療面接をはじめていた。彼女は、私からいくらかの

距離を置いて、椅子に座り、私は彼女になかば顔を向けるようにして、別の椅子に座っていた。十分ほど経ったが、その間、彼女は身じろぎひとつせず口もきかなかったので、私の気持は、ついつい、自分自身の関心事のほうへそれて行きかけた。そうしたさなかに、ごくわずかな声で彼女がこういうのを私は聞いた。〈ああ、どうか、私からそんなに離れて行かないでください〉（R. D. レイン, 1975, pp. 124-125）

ある日の診療で、何も語らない患者に対して、レインの心は、別のことに移ろってしまう。そのとき、患者はそれを非難するように「ああ、どうか、私からそんなに離れて行かないでください」と懇願するのである。あなたなら、どうするだろう。美しい理想につながる、⑤の回答のように「そんなに離れて行かないでください」とそんな気がするんですね、と返すだろうか。そのように聴くことで、彼女の全存在を受け止めようとするだろうか。しかし、このときレインは、多くの精神科医やカウンセラーが選択する、その鸚鵡返しによっては、患者が認めてほしい「私から医師としてのレインが離れていつている」という事実を認めることにはならない、と指摘する。

そしてレインは、たった一つの言葉を、あたかも自然に口から出る言葉のようにして語ることになる。

それゆえ、私が患者に向かっていえた唯一のことは、こうであった、〈ごめんなさいね〉（R. D. レイン, 1975, p. 126）。

そう、シンプルに謝ることによって、私が彼女から離れていったことを受けとめ、そして彼女の存在を、実存を受け止めたのである。

そして私は、先ほどの授業の光景に戻るようになる。勉強が何の役に立つのかわからないと繰り返す生徒に、いったいどんな反応を私たちは返したのか。それは、ただその場にいる人たちが笑いあったのである。嘲笑や、見下すための笑いではなく、勉強することの意味がわからないという生

徒の言葉を受け止めるようにして、暖かな笑いが教室に満ちていた。私はそのように自然な笑いが誰かを受け止めることを、聴くことのもう一つの可能性として、考えてみたい。

V おわりに

もう一度繰り返そう。誰かの話を聴くことは、ケアの重要な形であり、そこには美しい理想がある。私たちが孤立した人間として生きるのではなく、ときに依存し、ときに援助し、ときに支え合うような存在として、この社会に生きるときに、私たちは誰かを、何かをケアし始める。その聴くことの可能性は、どこまでも理想に満ちていて、聴くことのあり方も、私たちのあり方が様々であるように、様々である。しかし、私が p4c に魅了され、これまで様々な子どもたちの話を聴き、世界への Wonder とともに探求を繰り返してきたことには、確かに子どもたちを援助し、支え、そして相互依存しながら生きてきた手触りがある。

しばしば質問される「他のクラスとあなたのクラスでは、何かくつろぎの感覚や、子どもたちの話す具体例の親密さが違う」。「なぜあなたはそんなにうまく、子どもたちの話を聴き、探求を成功に導けるのか」といった質問に対して、私はやはり、このように答えてみたい。「そういうことではないです。うまい探求のやり方があったり、よりよく聴く方法があったりするわけではありません。そうではなく、ただ聴こうとする人たちがそこにいるだけなのです」と。

注

本研究は基盤研究 (B)「哲学プラクティスと当事者研究の融合：マイノリティ当事者のための対話と支援の考察」(19H01185) 及び、基盤研究 (C)「哲学資源としての漢文教材および学び方の開発に関する基礎的研究」(20K02730) 一環として行われたものである。

文献

キャロル・ギリガン 1986. 岩男寿美子訳『もうひ

とつの声—男女の道德観のちがいと女性のアイデンティティ』川島書店。

ズビグニェフ・コトヴィッチ 2020. 細澤仁, 筒井亮太訳『R. D. レインと反精神医学の道』日本評論社。

永井玲衣 2021. 『水中の哲学者たち』p. 97. 晶文社。
ファビエンヌ・ブルジュール 2014. 原山哲, 山下りえ子訳. 『ケアの倫理 —ネオリベラリズムへの反論』白水社。

鷺田清一 1999. 『「聴く」ことの力 —臨床哲学試論』阪急コミュニケーションズ。

R. D. レイン 1975. 志貴春彦, 笠原嘉訳『自己と他者』みすず書房。

Carol Gilligan 1982. *In a Different Voice*, Harvard University Press.

Fabienne Brugère 2013. *L'éthique du « care »*, Presses Universitaires de France.

Laurence Kohlberg 1973. “Continuities and Discontinuities in Childhood and Adult Moral Development Revisited”, in *Collected Papers on Moral Development and Moral Education*, Moral Education Research Foundation, Harvard University.

R D Laing 1961. *Self and Others*, Routledge.

Thomas Jackson 2001. "The Art and Craft of 'Gently Socratic' Inquiry", published in *Developing Minds: A Resource for Teaching Thinking*, (3rd edition), Arthur L. Costa (editor), ASCD (Association for Supervision & Curriculum Development), Alexandria, Virginia.